

## 都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

67

2011  
0425

春光うらかな季節となりました。3月の東日本大震災発生を受け、混乱の新年度を迎えた方も多いのではないでしょうか。まずは、被災地の皆さまに謹んでお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

2011年度最初の都市史研究会ニューズレターをお届けいたします。本号では昨年12月に開催されたシンポジウム「伝統都市論」、3月に東京大学GCOEプログラム〈都市空間の持続再生学の展開〉部会「東京フィールド研究会」と共催いたしました「都市フィールドワークの開拓」についてそれぞれの参加記を掲載いたします。

未だ不安な日々を送られている方も多いことは存じますが、皆さまのご健康とご多幸をお祈りいたします。2011年度もどうぞ都市史研究会へのご理解とご助力をよろしくお願い申し上げます。

---

## 都市史研究会シンポジウム「伝統都市論」

2010年12月4日（土）5日（日）の2日間にわたり、とらっど3および都市史研究会共催によるシンポジウムを開催いたしました。本シンポジウムでは2010年に刊行されたシリーズ『伝統都市』全4巻の書評が行われ、評者、編者、執筆者などを中心に多くの方々による白熱した議論が展開されました。さらに若手研究者による各巻のテーマ（アイデア・権力とヘゲモニー・インフラ・分節構造）に関連する個別報告も行なわれ、充実した内容となりました。なお、当日は72名の方々にご参加いただきました。以下に参加記を掲載いたします。

### 参加記

昨年12月4、5日の2日間にわたり、都市史研究会+とらっど3シンポジウム「伝統都市論」が開催された。このシンポジウムは、シリーズ『伝統都市』全四巻の刊行（2010年4-8月）を記念して行われたものである。1日目は「伝統都市論」をテーマとした若手研究者による個別報告が4本行われた。つづく2日目は石井規衛氏（東京大学、ロシア近現代史）・五味文彦氏（放送大学、日本中世史）・近藤和彦氏（東京大学、イギリス史）・陣内秀信氏（法政大学、西洋建築史）・高橋康夫氏（花園大学、日本建築史）を招いての『伝統都市』の書評会が午前中に行われ、午後の部では編者吉田伸之、伊藤毅両氏を加えてのラウンドテーブルが行われた。ここでは全日程の内容を簡単に振り返りつつ2日目の議論を中心に若干の感想を述べさせていただく。

坪内綾子氏による「中近世における春日信仰と奈良町——春日講を中心として」は、元興寺を中心とした

小規模な町の結集である奈良町の形成を、各町が共通してもつ春日社への信仰から読み解くものであった。東辻賢治郎氏による「ロンドン・ムアフィールドズについて」は、旧ロンドン市壁の北部に位置するムアフィールドズの土地の来歴から市街地至近における湿地・沼地の意義を考察するものであった。登谷伸宏氏による「陣中から惣門之内へ——公家町の成立とその空間的特質」は、中近世移行期における京都の内裏をとりまく都市空間の変容と空間的特質についての報告であった。公家町の建設と陣中概念の変容の関係を惣門之内の成立として論じており、丁寧な文献解読による復元的な都市空間の考察は意義深いものであると感じた。角和裕子氏による「江戸の粉屋と水車稼人——開港前後、粉を巡る諸動向」は、江戸における水車稼人と粉屋の動向を小麦粉の流通を通してみた報告であった。粉と雑穀の流通における扱いの差異を読み取り、粉屋が陸運と舟運という流通方法によって地域に分布していることを指摘した。

2日目の午前中は五名の先生方による書評会にあてられた。紙面の関係上、それぞれの詳細な議論に立ち入ることはできないが、主として「伝統都市」概念の問題を根幹に、各巻の共通論題である四つの柱<イデア・権力とヘゲモニー・インフラ・分節構造>への批評が各巻の共通の論点であったと思われる。「伝統都市」という柔らかくで広義な都市概念の導入により、時代区分に規定されない歴史叙述が可能なことや現代都市への批判的視座を獲得できることに対しては全体を通し評価がなされた。一方で、「伝統」という言葉の持つ意味の不安定さへの批判やシリーズ四巻の多くの論考が近世期に集中しており「都城」や「城下町」といった都市類型に議論が集約されがちであり、それゆえ二類型から漏れる時代や地域が欠落していることや一冊を通して全体史としての像が結ばれていないのではないかと指摘もなされた。

午後の冒頭には編者吉田伸之・伊藤毅両氏から各書評へリプライが先行してなされた。吉田氏からは「伝統都市論」という視角の可能性と小規模伝統都市論・比較類型把握といった都市史叙述の発展性が、伊藤氏からはシリーズ『伝統都市』が編まれるまでの研究活動や編集作業などのプロセスを踏まえての本シンポジウムの位置づけが語られた。つづく全体討議では、多くの執筆者やシリーズの担当編集者が会に参加していたこともあり、彼らからの伝統都市論、各巻の共通論題への批評やコメントもなされ、議論は非常に有意義なものであった。

討論中に指摘がなされた都市と対外関係（文化交流・都市間ネットワーク）の問題やシリーズ『伝統都市』ではあまり対象化されなかったアジア都市の問題は今後の重要な課題といえよう。そして、「伝統都市」についての諸研究が「現代都市論」と表裏一体の関係にあるとすれば、従来の近代都市論の意義はどこにあったのか、あるいは「近代」「近代都市」とは何であるのか、近代史を専攻する一個人として深く考究せねばならないと切に感じた。

高橋元貴（東京大学大学院工学系研究科）



書評会の様子（二日目午前）



ラウンドテーブルの様子（二日目午後）

## 「都市フィールドワークの開拓——布野修司先生にうかがう」

2011年3月5日、東京大学工学部1号館15号教室にて東京大学GCOEプログラム〈都市空間の持続再生学の展開〉部会「東京フィールド研究会」主催、ぐるーぷ・とらっど3共催による公開講演会を開催いたしました。シリーズ第3弾となる今回は布野修司氏（滋賀県立大学）をお招きし、氏がフィールドワークを行うに至った経緯を伺いながら、そこから生れた著作の書評などを行いました。以下に参加記を掲載いたします。

### 参加記

3月5日、ぐるーぷ・とらっど3と東京フィールド研究会(東京大学グローバルCOEプログラム「都市空間の持続再生学の展開」)の共催で、滋賀県立大学の布野修司先生をお招きし「都市フィールドワークの開拓——布野修司先生にうかがう」と題した公開講演会が行われた。東京フィールド研究会は今までに二度公開講演会を行っており、第一回には陣内秀信先生（法政大学）を、第二回には水内俊雄先生（大阪市立大学）をお招きし、いずれもフィールドワークに関する議論を行っている。

今回の講演会は三部に分かれており、第一部では布野先生の東京大学時代から京都大学へ赴任されるまでの軌跡を「Xから都市組織研究へ」と題して紹介していただいた。すなわち、建築計画学を出自とする布野先生が、都市組織研究へと進んだ軌跡である。講演は布野先生が学部二年生の時に受講した、吉武泰水先生の授業のエピソードから始まった。吉武先生は授業でご自身が関わった「北病棟問題」を題材とし「計画をすることとは何か？」という問を学生に投げかけた。布野先生はこれに大変衝撃を受け、建築計画とは何なのかという問いを考え始めたという。この計画学に対する疑問が、その後の布野先生の活動の根底にある。東大時代は2DKのテラスハウスからはみ出した増改築の調査、建売住宅のファサード分析を行う一方で、雛芥子や、宮内康氏を中心とした同時代建築研究会など研究とは異なる世界でも活動された。また、この時期、建築計画学史を調べたことが、後の『戦後建築論ノート』誕生のきっかけとなったという。東洋大学に移られてからは、広義の計画学として生産組織研究を行い、団地の増築を大工と関わりながら調査された。生産組織研究は大野勝彦氏・渡辺豊和氏・石山修武氏と始めたHPU、あるいは『群居』でも展開され、さらにカンポン調査においても街に素手で入って行って、そこで計画学は何ができるか、という問いに繋がるものであったといい、非常に印象的であった。

第二部「布野先生の著作を読む」では、東京フィールド研究会メンバーが布野先生の著作『戦後建築論ノート』（相模書房、1981年）、『カンポンの世界』（PARCO出版社、1991年）、『近代世界システムと植民都市』（京都大学学術出版会、2005年）それぞれの解題を行うとともに質問を行い、それぞれの著作ごとに議論が行われた。ひとつ目の『戦後建築論ノート』に関しては、その現代的な意義について、昨今の戦後建築を対象とする建築界の諸活動について議論が交わされ、『カンポンの世界』については、布野先生のフィールドワークの方法論への当時の東京大学建築計画（鈴木成文）研究室、東洋大学のスタッフの影響について、また東京大学建築史（稲垣栄三）研究室、陣内秀信先生の方法論を布野先生はどう見ておられたのかということが議論された。『近代世界システムと植民都市』を中心とした世界各地でのフィールドワークについては、カンポン以降の「植民都市」という視点について、個別の都市での成果の編集作業についての議論が行われた。

第三部では布野先生と脇田祥尚先生（近畿大学）による対談が行われた。脇田先生は京都大学へ布野先生が赴任された際の1期生である。脇田先生からはカンポン以降、俯瞰的な視点へと変質した布野先生のフィールドワークに対する「不満」が投げかけられ、さらにフィールドから立ち上がる建築計画学を布野先生こそ構築すべきであるという提案がなされた。

最後に以上の講演・対談に対して、青井哲人先生（明治大学）から都市組織論に引き寄せたコメントがあった。

今回の公開講演会は、多岐にわたる布野先生のご活躍を凝縮し紹介した、極めて濃密なものであった。特に、2DKはじめ住戸計画を中心とする建築計画学への批判的展開として、都市組織研究へと進んだ布野先生の軌跡は極めて特殊であると改めて感じさせられた。しかし、住戸を積み重ねるようには都市をつくることはできないという布野先生のお話が大変興味深かったが故に、その展開において先生が考えた問題群はいかなるものであったのかという議論が進まなかったのは残念である。また、最後の青井先生のコメントで指摘があったが、都市組織という言葉は、現在非常に曖昧な言葉として使用されている。ヨーロッパのように土地と建物が強固に関係し合う都市組織ではない、日本やアジアの都市組織を捉える方法論の構築、また都市組織という概念自体の議論が今後必要となることは必至であろう。

石樽督和（明治大学理工学研究科）

---

News Letter 都市史研究 Vol. 67

2011年4月25日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内

編集担当：岩本葉子（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）

レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）